



普通高等教育“十一五”国家级规划教材

第2版
高等学校日语教材

日本

日本の社会・文化読解

社会文化



读解

王秀文◎主编

吸收和掌握日本社会、文化基础知识
锻炼日语阅读、思考、分析和表达能力
以最具有代表性的名人、名篇为基本素材
文章中添加部分解释以及提出需要思考的问题

 大连理工大学出版社



育“十一五”国家级规划教材

第2版
高等学校日语教材

日本

日本の社会・文化読解

社会文化



读解

主编 ◎ 王秀文

编者 ◎ 王秀文 黄英兰 张淑英 秦颖



大连理工大学出版社



图书在版编目(CIP)数据

日本社会文化读解 / 王秀文主编. —2 版. —大连: 大连理工大学出版社, 2009. 5

ISBN 978-7-5611-2559-5

I. 日… II. 王… III. 文化—研究—日本 IV. H131.3

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2004)第 024530 号

大连理工大学出版社出版

地址: 大连市软件园路 80 号 邮政编码: 116023

发行: 0411-84708842 传真: 0411-84701466 邮购: 0411-84703636

E-mail: dutp@dutp.cn URL: <http://www.dutp.cn>

大连理工印刷有限公司印刷 大连理工大学出版社发行

幅面尺寸: 185mm×260mm

印张: 14

字数: 316 千字

印数: 6001~8000

2004 年 8 月第 1 版

2009 年 5 月第 2 版

2009 年 5 月第 3 次印刷

责任编辑: 王佳玉 于 洋

责任校对: 萧音 张宇

封面设计: 张 虎

ISBN 978-7-5611-2559-5

定 价: 28.00 元

前言

本教材是为“日本社会与文化概论”课程而编写的，适用于大学日语专业本科高年级学生和硕士研究生的课堂教学与自学。自2004年8月由大连理工大学出版社初版发行以来，得到使用学校师生的好评和社会的认可，2007年被选定为教育部普通高等院校“十一五”规划教材。

在国际化社会不断深入发展的今天，外语专业的学生加深对对象国社会、文化的了解已成为专业素质的重要内涵，也是顺利进行跨文化理解和跨文化交际的重要保证。因此，在教学中加入社会、文化的内容是必要的。

然而，社会、文化的内涵宽泛而繁杂，加之学时有限，如何选择和界定与跨文化交际能力培养最为相关的内容，采用什么样的教学方法更为实际和有效，是我们开展该课程教学建设和教材编写所重点思考的问题。通过2000年以来的教学实践，我们认为这门课程采取基于原文的日语授课最为科学有效，而且适合采用小班型的“讨论式”教学方法。这种教学方法要求学生课前熟悉教材内容并解决一般性语言障碍，适当查阅资料并带着问题进入课堂用日语进行交流，即在吸收和掌握日本社会、文化基础知识的同时，还可锻炼学生用日语阅读、思考、分析和发表的能力。

基于此，我们力求筛选日本社会、文化方面最具代表性的名人、名篇作为基本素材，以1)、2)、3)方式对一些妨碍理解的词语进行必要解释，结合理解需要以★形式提出必要的思考问题，从而提示学生抓住内容重点进行深度思考。

在本教材修订、编写时，大连民族学院日语教师秦颖承担第一篇、张淑英承担第二篇、黄英兰承担第三篇的编写工作，王秀文承担第四篇、第五篇、第六篇的编写和负责全

目 录

第一篇 日本の自然と文化

1. 自然と人間 2
2. 日本の風土 7
3. 日本文化論 12

第二篇 日本人の信仰と生活

1. 日本の祭 18
2. 地獄の思想 23
3. 禅と日本文化 29
4. 祖先崇拜 34
5. 民間信仰 39

第三篇 意識と思想

1. 日本人の思惟方法 46
2. 日本人の意識構造 51
3. 日本の思想 56

第四篇 日本の社会構造

1. 家族内の人間関係 62
2. 家族(ウチ)とソトの関係 87
3. 「タテ社会」の検証 98
4. 現代の女性問題 110

5. 高齢社会	114
---------	-----

第五篇 日本人の行動様式

1. 生活と文化	122
2. 交際と贈答	132
3. カルチャーショック	142

第六篇 日本人の精神構造

1. 「甘えの構造」の検証	176
2. 「恥の文化」の検証	189
3. 「日本教」の検証	205

参考文献	217
------	-----

聞入も然自江

第一篇

日本の自然と文化

1. 自然と人間

中野尊正・小林国夫『日本の自然』

1943年12月、北海道の¹⁾有珠岳^{うずだけ ふし}の麓に大事件が起った。その一帯にわたって地鳴りをともなう地震が頻繁に起りはじめ、一日百回をこえた。そこを走っている鉄道のレールが持ちあがり、24メートルばかりの小山ができた。田畑は割目だらけになり、井戸水が涸れ、付近の人びとは刻々と迫る地変に不安な日夜をおくった。翌年の6月、とうとう最大隆起を示した畑から噴煙がはじまった。その年の終りには、150メートルほど盛りあがった。そして今度は、★この新火山の頂上から黒ずんだ尖峰^{せんぽう}が見えはじめ毎日60センチずつ成長し、ついにその頂点は400メートルにたった。この熔岩尖峰^{ようがんせんぽう}こそ地下にいて地震を起したり異変を起した化物^{ばけもの}の正体だった。

フランス中央高地のオーヴェルニュは、火山の博物館といわれるほど多くの火山を擁しているが、日本もその数と種類のうえでけっして劣らない★火山の博物館である。富士山をはじめ、日本の活火山は四十を超えるが、その数は世界のやく十分の一を占める。のみならず、日本は火山活動を目前に見せてくれる火山の実験室でもある。

地震頻発^{ひんぱつ}の点でも、また日本に第一級の国である。東京では、毎年4~50回の有感地震がおり、全国では二年に一回くらいの割で、破壊的な地震が起っている。日本における地震で見逃せないのは、²⁾津浪^{つなみ}による被害が小さくないことである。日本列島の外側には地震の頻発帯があり、そこで起る海底地震はしばしば津浪を伴う。この点で、³⁾環太平洋火山帯は、同時に地震帯であり、また津浪帯でもある。

火山、地震、津浪それに台風、洪水など、かんばしくないことが多い日本で、景勝地^{けいしょうち}と★温泉の多いことは、なぐさめであろう。温泉は、古代から入湯、医療に利用され、

1) 有珠岳：北海道南西部、内浦湾に面する二重式活火山。最高峰の標高は732メートル。

★この新火山のできた様子を簡潔に述べてください。

★日本は火山の博物館と実験室であるという表現に注意し、その意味を述べてください。

2) 津波：地震や海底火山の噴火などによって生じる非常に波長の長い波。海岸に近づくとき急に波高を増し、港や湾内で異常に大きくなる。

3) 環太平洋火山帯：太平洋のまわりに分布する火山の総称。地球上の「火の輪」とも表現。

★温泉の多いことはなぜですか？

一九五四年の統計では温泉地1133、湧出口数8452が記録されている。

日本の子供によく知られた次の汽車の旅の歌がある。
「今は山中 今は浜 今は鉄橋渡るぞと 思う間もなくトンネルの 闇を通して広野原」★この歌は、日本の地形—山もその間の平野や盆地も、いずれも小規模で変化に富むことを示している。日本の地体構造は、いたって小規模であり、その構造的単位の成立の地質年代もまちまちであり、そのうえ現在でも隆起、沈降、褶曲が活発におこっている地域をふくむ。つまり小規模なモザイク構造が、日本の地形の特質であるが、いっぽう小さな島国であるにもかかわらず、山が高いのもその特徴である。

日本列島は、北から南に長く¹⁾ユーラシア大陸の東側をふちどり、山がちであるため、気候型の種類に富んでいる。地域的なバラエティーに富むだけでなく、夏冬のコントラストもいちじるしい。年間の気温較差は大きく、四季のうつりかわりを鮮明にする。中部ヨーロッパの、春と秋が短かく、初夏と冬が長い気候と較べて、四季のうつりかわりの繊細さは、植物の多彩な変化をとおして、ことさらに日本の季節感を豊かにしている。冬の雪、春の花、初夏の新緑、夏の濃緑、秋の紅葉、晩秋の落葉など、日本的な自然の変化をみちびいている。俳句のような独特の季節詩が生れたのもそのためだろう。

また、日本は²⁾モンスーン地域に属し、世界有数の多雨地帯であり、人によっては³⁾アマゾンより住みにくいという夏の高温多雨、秋の台風、軒をうめつくす北陸の多雪も日本の気候の特色である。日本の桜は、南では三月に開きはじめ、北海道の北では六月初めになる。南から北に、桜を追って三カ月の春を楽しむこともできる。冬、乾燥した東京から、新潟に旅すれば、日本海岸の多雪とのコントラストを体験することもできる。極言すれば、★日本は気候のデパートということもできよう。

★この子供の歌を味わいながらモザイク構造の日本地形を考えてください。

1) ユーラシア大陸：アジアとヨーロッパの総称。一続きの大陸をなし、面積は世界最大。

2) モンスーン：季節風のこと。本来はアラビア海で半年交代で向きが変わる風をさし、季節の意のアラビア語が語源。

3) アマゾン [Ama Zon]：南アメリカの大河。密林が流域の大部分をおおい、長さ約6770キロメートル。

★ここで日本の気候の特色を考えてください。

★高い山に降った多くの雨雪は、澄んだ急流となって流れ、谷を深く浸蝕し、地表に細かい網状のV字谷、大小の谷を発達させ、独特の^{けいこく}渓谷美が見られる。そして山地を出た川は洪水のたびに多くの砂礫^{されき}を堆積^{たいせき}して、扇状に堆積平野をつくり出す。日本には、ヨーロッパのような広い浸蝕平野は見られず、すべて小規模な堆積平野であり、すぐ先には海が迫っている。日本の平野は山の付属物といってよい。

人口の密な日本では、この平野という平野は、古くから人間によってあますところなく利用され、人びとはそれこそひしめきあって生きている。この人口が、長い歴史のあいだに、平野の自然的性質をはなはだしく変容し、平野や^{だいち}台地まで水田化する過程において、河川にも人為的な影響が加えられた。人為の影響はまた、地質、地下水、植生などとともに、日本の土壤にも多様性を与える条件となっている。世界的に見ると、気候区と土壤区はよく一致しているが、日本の場合にはこれは妥当しない。日本の水田地域では、天然自然のままの土壤はもはや見られない。水稻は、元来、熱帯の植物であるが、日本では温帯をとおりこして北緯四五度をこえる寒帯地域にも、また中部の山岳地帯では、1300メートルをこえる高冷地にも、人間の努力によってその栽培が行われている。

日本の植物の世界は、おおむね天然のままの自然ではない。関東の^{むさしの}武蔵野も、多くの火山の裾野^{すその}の草原も、人手の加わったものであり、私たちが車窓からみる森林も、人為的に形成された森林である。天然のままの森林相は、今では山奥とか、ふるい神社の森などから類推されるに過ぎない。しかし、それでも日本列島はかなり高い山まで森に^{おお}蔽われ、南から暖帯林、温帯林、寒帯林と移行し、また山地の高さが高くなるにつれて気候がかわり、それに対応して水平分布とほとんど同じ植物相の垂直分布を示す。

すでに述べたように、日本の季節のうつりかわりは、気温の変化によって、また木々の葉の色のうつりかわりを通して感じることもできるが、さらに^{わた}渡り鳥^{どり}によって知ることができる。木々の若枝が芽を吹き、さわやかな緑につつまれ

★ここで、河川と平野の特徴から日本の地形を考えてください。

1) 台地：表面が比較的平らで、周囲より一段と高い地形。ほぼ水平な地層からなる。

2) 武蔵野：東京都と埼玉県にまたがる洪積台地。南は多摩川から、北は川越市あたりまで広がる。古くは牧野、江戸時代から農業地に開発され、雑木林のある独特の風景で知られた。

3) 渡り鳥：繁殖する地域と非繁殖期を過ごす地域とが離れていて、毎年決まった季

るころ、日本列島はいろいろの渡り鳥で賑わう。日本は、北から南へ、南から北へと移る渡り鳥の道であり、休息の場所である。ツバメ、カッコウなどは初夏におとずれるいわゆる夏鳥であり、ハクチョウやツグミなどの冬鳥は、北の寒い国から避寒のため日本旅行としゃれこむ。比較的せまい範囲を行動するウグイスのような^{ひょうちよう}漂鳥もいる。こちらは毎年ほとんど同じような道を飛んで移動するので、地方によって渡来したり、飛び去って行く時期がことなり、俳句や歌にも古くからうたわれている。

【解説】

日本の風景は、しばしば“箱庭式”^{はこにわ}と呼ばれる。箱庭とは、小さな箱の中に山、川、森、家など自然と人間の^{いとな}営みが作りだす風景をミニチュア・サイズで再現する子どもの遊びである。こういう遊びが存在すること自体、日本の風景が複雑でこぢんまりしている事実を示している。また、本書でも触れられているように、日本は気候のデパートで、いっそう自然を^{たさい}多彩なものとしている。著者たちはこのような日本の自然に着目しながら、その構成要素である山、平野、川、海、湖、気候、生物群などの特色を、豊富な具体例をあげながら、同時に鳥瞰的に捉えている。その記述は、最新の地質学、自然地理学から人文地理学にいたる研究成果をふまえ、学問的に正確であるとともに、一般読者向けにわかりやすく説かれている。

本書では「日本列島の自然の生成」が説かれていると同時に、この列島に住んだ人間の歴史が、その自然とどのようにかかわってきたかが描かれる。著者たちは「日本の自然は、われわれの生活環境として大きな意義を持つ」と指摘しているが、それはまた編者が、本書をこのガイドブックの一冊としてリストに加えた理由である。著者たちは、地理学の専門家であるが、その記述において、たとえば日本の寒さにくるしむ貧しい日本人の訴えが、^{ひんきやうもんどう}2) 万葉集の有名な歌（山上憶良の「貧窮問答」）として詠まれたり、四季の独特のうつ

節にその間を往復移動する鳥。

1) 漂鳥：ある地域内で季節によって居所を変える鳥。

2) 万葉集：奈良時代の歌集。大伴家持が現存の形に近

りかわりが俳句のような季節詩を生む原因となったことなど、自然の文化的影響についても、たくみに触れている。自然の人間におよぼす影響は大きく、それは人間の生産と生活の様式をつうじて、その心情、言葉、その他多方面にわたって人間に働きかける。本書は、日本の自然地理の入門書として意味をもつばかりでなく、日本文化への入門書としても基礎的な意味をもつ。

(村上兵衛『日本文化提要』、日本出版貿易、1977年による)

いものにまとめたとされる。短歌・長歌・連歌などの五体で、歌数4500余首。約400年にわたる全国各地、各階層の人の歌が収められる。現存する最古の歌集で、万葉仮名を多く用いている。

【例题 3】

2. 日本 の 風 土

和辻哲郎『風土』

風土の概念

私がここで¹⁾風土と呼ぶのは、ある土地の気候、気象、地質、地味、地形、景観などの総称である。しかし、ある人間を取りまいて、その土地の自然環境は、たんに彼の外に存在しているのではない。たとえば空気の温度と湿度の特定の状態は、彼の内に「爽かな気分」をひきおこす。そのように、彼は風土によって自己を了解する。その了解の仕方は、風土によって特殊である。たとえば、人間の衣、食、住あるいは使用する道具は、彼の住む土地の風土に適応して特殊に発達した。彼は、それらの客体をつうじて、特殊的に自己を了解している。★ある土地の人びとの社会や歴史も、また、風土の型から逃れることができない。風土の型は、同時に歴史の型である。しかし、私がここに述べるのは、人間存在の歴史的・風土的構造を、とくに風土の側から把握しようとする試みである。

1) 風土：その土地の気候・地味・地勢などのありさま。また、人間の文化の形成などに影響を及ぼす精神的な環境。

★ここで、人間と風土との関係について理解を深めてください。

三つの類型

世界の風土には、三つの類型がある。★それにモンスーン、沙漠、および牧場であり、アジア、アフリカ、ヨーロッパにそれぞれの典型を見出す。モンスーン地域の風土的指標は湿潤である。そしてその地域における人間の性格は、受容的・忍従的である。沙漠地域の風土的指標は、いうまでもなく乾燥である。そして、その地域における人間の性格は、実際の・意志的である。彼らはまた、全体への帰属、服従性^{にんじゅう}において目立つとともに、外にむかつては戦闘的である。牧場地域の風土的条件は、夏の乾燥と冬の湿潤である。その地域、とくにヨーロッパ文明の発祥地である²⁾ギリシアにおいて、自然は人間に対して従順であった。自然が暴威を振わないところでは、自然が合理的な姿となって彼じしんの姿をあらわしてくる。この地域における人間の性格は、一言でいえば合理的である。

★ここで、風土の三つの類型の指標とそれによる人間の性格の違いを覚えてください。

2) ギリシア：ヨーロッパ東南部の共和国。古代文明の発祥地で、前2500年ごろから石器・青銅器文明が発達。

モンスーンの風土の特殊形態

モンスーン地域には、日本も中国もインドも含まれるが、★日本はモンスーン地域のなかで最も特殊な風土を持つ。インドがきわめて規則的な季節風を持つのに較べて、日本は大陸と太平洋の影響を受けて、きわめて変化に富む季節風に揉まれる。台風は季節風的な風ではあるが、予測を許さない突発的な暴風雨となる。また日本の積雪の多量さは、世界でもマレである。このように、日本は熱帯的と寒帯的の二重性格の風土である。熱帯植物である竹に雪の積った姿は、日本の特殊な景観として、よく例に出される。

モンスーン地域における人間の受容性、忍従性は、日本の人間においてはきわめて特殊な形態をとる。それは単に熱帯的な、単調な感情の持久性でもない。日本人の感情は、調子の早い移り変りを要求する。それは大陸的な落ちつきを持たず、はなはだ活発で敏感である。それゆえに、また疲れやすく、持久性を持たない。人間の感情は、台風のように突発的な強度を示すことがあるが、それは持続する感情の強さではない。だから日本人は、しばしば執拗な争闘をともなわずに社会を全面的に変革する、というような歴史的現象さえ作り出している。日本人は感情の昂揚を尊びながら、しつこさを嫌う。★彼らが愛するのは、急激にあわただしく、華やかに咲きそろうが、あっさりと散り去る桜の花である。

日本人は反抗や戦闘を熱心に讃美する。しかしそれは同時に執拗であってはならない。彼らは生への執着のただなかにおいて、突然、生への執着をまったく放棄する。日本人の恋愛の型から、日本人の性格をさぐると、上の事情ははっきりと浮びあがる。日本の古典にあらわれる恋愛譚は、いつの時代においても「激情を内に蔵したしめやかな情愛、戦闘的であるとともてんたんなあきらめを持つ恋愛」というひとつの類型をしめしている。¹⁾「情死」はそのなかのもっとも明白な人たちである。江戸時代の文芸が好んで主題とした、この情死は、たんに精神的な「あの世」の信仰にもとづいたものではない。それは生命の否定によって恋愛を肯定してい

★この言葉の意味をよく理解してください。

★この言葉を通して、日本人の性格の特殊性を理解してください。

- 1) 情死：相愛の男女による心中。この世で結ばれないことから、来世で結ばれることを願う。日本独自の死生観を反映する。

る。恋愛の永遠を欲する心が、瞬間な精神の昂揚によって心中の形に結晶するのである。

家族としての人間の関係は、牧場、沙漠、モンスーンそれぞれの地域によって明白にちがっている。牧場的文化のはじまりはギリシア人の海賊的冒険であった。その郷土の牧場を離れた冒険的な男たちが、多島海沿岸の諸地方を征服して原始的¹⁾ポリスを建設しはじめたとき、彼らは征服地の女を取って妻とした。すなわち家族から脱出した男たちと、殺戮によって家族を破壊された女たちとが、そこに新しい家族を形成した。それゆえギリシア人がもともと祖先崇拜の慣習をつよく持っていたにもかかわらず、ポリスの形成以後、彼らの家の意識はポリスに対するものよりはるかに軽くなった。家族は夫婦の見地から把握され、血統的には何某の子として、せいぜい父の名が挙げられるくらいである。これに対し、沙漠型の家族は、祖先以来の血統をうけついだ伝統的存在として把握されている。処女から生れたイエスさえも「²⁾アブラハムの裔」「³⁾ダビデの裔」である。しかし、沙漠的な存在の仕方では、この家族の優位は部族の優位に及ばなかった。遊牧生活の単位は部族であって、家族ではない。

家族的な生活の共同に、もっとも強く重心をおいたのは、モンスーン型の家族である。とくに中国および日本における「家」であった。それは沙漠的な家族と同じように血統的な存在であるが、部族のなかに融けてしまうことがない。

そこでは、家は全体性を意味する。家は家長によって代表されるが、家長の恣意によって存在するのではない。その特徴は、現在の家族が、過去と未来にわたる、つまり祖先から子孫にいたる「家」全体にたいして責任を負っていることで、家の存続と名誉のためには家長でさえ犠牲となることがある。そして、家族の間柄を結ぶものは、へだてのない結合をめざすしめやかな情愛である。『万葉集』にうたわれた山上憶良の次の歌は、日本人の情感をよくあらわしている。

しろがねも黄金も玉もなにせむに

まされる宝子にしかめやも

1) ポリス [Polis]: 古代ギリシアの都市国家。前9世紀ごろ、氏族社会から貴族制への移行の過程に成立。

2) アブラハム [Abraham]: 旧約聖書に記されるイスラエルの民の祖。信仰厚い人格によりすべての人の模範として、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教においても厚く尊敬される。

3) ダビデ [David]: 古代イスラエル統一王国第2代の王。前1000ころー前960ころ在位。イスラエル史上最大の繁栄をもたらし、後世理想の王とたたえられた。

日本人は、家を通常ウチとして把握している。それに対して、家の外の社会がソトである。★この内と外の区別は、きわめて強い。妻や子、あるいは夫は「うちの人」であり、それ以外の人びととはっきり区別される。その事情は、家屋の構造にも現れている。日本人は、家の中の部屋を、鍵によって区切ることがない。個々の部屋の区別は消滅し、たとえ襖によって仕切られていても、それは相互の信頼によって区切られているだけである。ヨーロッパにおいては、まず部屋が最小の単位であり、つぎの共同生活の単位は城壁に囲まれた町であった。その中間の家の意味は相対的に軽く、そこに彼らの社交性や距てながらの共同性がある。日本人は、外形的にヨーロッパ生活を学んでも、家に規定されて個人主義的・社交的公共生活の下手な点では、ほとんどヨーロッパ化していないとも言える。

【解説】

本書は、倫理学者、文化史家として知られる著者が、1930年前後に発表した諸論稿を、その後加筆して一冊にまとめたものである。著者は、第一章で「風土」という概念を規定し、第二章で文化の型が風土によって規定されることをモンスーン型、沙漠型、牧場型の三類型によって論じた。第三章は、モンスーン型の特殊形態として、中国と日本の風土と文化について論じている。さらに第四章は、芸術の風土的性格を論じ、ここで著者は「規則性」を視点として東洋と西洋の芸術を比較している。結論的にいえば、合理的な規則性は西洋の芸術には当てはまるが、東洋の芸術には当てはまらないことを指摘し、例として庭園、絵画などをあげている。さいごの第五章は、風土学の歴史的考察で、ヒポクラテスからヘルデル、ヘーゲル、さらにマルクスやラッツェルまで、風土についての考え方の変遷が考察されている。

著者の風土についての考察の基本的な態度は、つぎの言葉に要約される。★「聴覚の優れたものにおいて音楽の才能が最もよく自覚され、筋肉の優れたものにおいて運動の才能

★ここで、ウチとソトとの意味をよく理解してください。

★ここからの内容をよく吟味してください。